

ただ君に晴れ

【ヨルシカ】

夜に浮かんでいた 海月のような付きが爆ぜた
バス停の背を覗けば あの夏の君が頭にいる
だけ

鳥居 乾いた雲 夏の匂いが頬を撫でる大人になるまでほら、背伸びしたままで

遊び疲れたらバス停裏で空でも見ようじきに夏が暮れても
きつときつと覚えてるから

追いつけないまま大人になって君のポケットに夜が咲く

口に出せないなら僕は一人だそれでいいからもう諦めてる
だけ

夏日 乾いた雲 山桜桃梅 錆びた標識記憶の中はいつも夏の匂いがする

写真なんて紙切れだ思い出なんてただの塵だ
それがわからないから、口を噤んだまま

絶えず君のいこふ 記憶に夏野の石一つ

俯いたまま大人になって追いつけない ただ君に晴れ

口に出せないまま坂を上った 僕らの影に夜が咲いていく

俯いたまま大人になった 君が思うまま手を叩け

陽の落ちる坂道を上って 僕らの影は

追いつけないまま大人になって 君のポケットに夜が咲く

口に出せなくても僕ら一つだ それでいいだろもう

君の思い出を噛み締めてるだけ